

公家の女性らが、室内で遊んだこまが発祥

「こま」というと多くは木製で、紐をエイッと投げて回し、元氣よく屋外で遊ぶ玩具というイメージだろう。一方で、今回ご紹介する「京こま」は、木綿の平紐をくるくると巻いてこまの形に仕上げ、指先で回して楽しむ室内遊び用のこまだ。「安土桃山時代、宮中や公家の女性たちが西陣織など着物の端切れを竹の芯に巻き付けてこまをつくり、手で回して遊んだのがルーツです」と二条城近くにある、京こま匠「雀休」の中村佳之さん。「日本各地にはローカル色が濃い多様なこまがあるのですが、木材を削ったものがほとんどで、布を巻いてつくる京こまはかなり特徴的なこまですね」

こまは、5千年前のメソポタミア文明の時代から存在すると言われ、世界各地でつくられてきた。日本最古のこまは7世紀ごろのもので、「古くは遊び道具ではなく、儀式のなかで吉凶を占うための道具だったようです。どちらに倒れるか、こまは神の宿るものとして、専門の占い師が厳かに回していたそうです」

さて、京こまは、江戸時代に入ると座敷遊びで使われるようになり、一般の人々にも広がっていく。大正時代には、染色技術が発達してカラフルな木綿の平紐が登場。京こまの材料は着物の端切れから、木綿の平紐に変わった。平紐でつくられる京こまは、観光客の土産物として人気になり、生産量も昭和にかけてぐっと増加。「戦後には、10軒ほどの京こま工房があつて、職人も50人ほどいたと聞いています」

ところが1980年代に入ると、土産物としては当時流行したタレントショップのグッズなどに押され、注文が激減。「遊び道具としてもファミコンなどが発売され、京こまの人氣は薄れていきました」。注文がなければ職人はお手上げ。京こま職人だった中村さんの祖母、父親は家業を廃業。父は一般企業へ転職した。



京こま職人

中村佳之さん



1980年、京都市生まれ。幼い頃より祖母と父の京こまづくりを間近で見て学ぶ。1980年代に途絶えた京こまを2002年、復活させた。京こま匠「雀休」にて制作・販売を行いながら、全国各地で京こまづくりを奨励し、魅力を伝えるのが、目的のスタイル。2025年にはフレンチエで実演。現在、ドイツ、イタリア、アメリカ、イスラエルにも作品を輸出している。



千支の午の京こま。色つきのほか、たてがみやしほなども平紐を使つてひらつと手づくりする。

西陣織でつくられた、クラシカルな京こま。優美な色彩がいかに京都らしい。このほか、京象嵌や京水引など京都の伝統工芸とコラボした京こまも数多くつくってきた。



きれいにこまが回るよう、さまざまな色の平紐をきっちりとタイトに巻いていく。「巻いてつくるといのは、縄文時代に帯状の粘土を巻いて器をつくったように、手仕事の原点でもあります」(中村さん)。京こま匠「雀休」では、京こまづくりの体験教室も開催している。



写真左／壬生菜、万願寺とうがらし、えびいもなど、人気の京野菜シリーズの京こま。写真右／ほかに、招き猫、フルーツなど眺めているだけで楽しくなる形の京こまが、工房内にはいっぱい！

色鮮やかな平紐を巻き付けてつくる
京都らしい、京都ならではの、京こま



芯棒に木綿の平紐を、より美しいこまになるよう隣り合う色を考えながら、何重にも巻き付けていく。「百貨店などで実演販売などをしていて、1980年代に廃業したという元・京こま職人の方も来てくださり、『がんばってや』と応援してくれるんです」と中村さん。お客さまからの「こんなこまがほしい」という声も作品づくりに大きな影響を与えるという。

他の京こま工房も同様で、一軒残らず廃業に追い込まれ、京こまは姿を消してしまつたのだった。

中村さん自身も高校卒業後、自然とサラリーマン生活をスタートさせた。あるとき、自宅の倉庫に眠る京こまの材料を引っ張り出してつくってみた。「子どものころから父親の仕事を見てきていたので、手がつくり方を覚えていました。廃業後もたまに注文があると、中学生だった私に『少しの注文やし、つくって納品しておいて』と父がいうこともあったんです」。大人になった中村さんは、京こまをつくってみて思った。「自分でこまを生み出すというのは、おもしろいなあ」と。サラリーマンとして携わっていた医療機器の営業にやりがいも自信もあった。どうせなら自分のつくつたもので営業してみたい。そうして2002年、35歳のとき、サラリーマンを辞め、京こま職人として歩み出したのだった。ただ、父親は「路頭に迷うぞ!」と心配して猛反対。和解できたのは、中村さんが京こま職人として軌道にのってからだった。

京野菜、山鉾…さまざまな形をこまに

「じゃあ、つくってみましょうか」。中村さんが京こまづくりを見せてくれた。先端のみ薄くのり付けした平紐を芯棒に巻き付け始める。「最初のひと巻き目が難しいんです」とはいえ、あまりにスムーズに巻き進めていく中村さんからは難しさが伝わってこない。「はは。そうですか。ひと巻き目は特に巻きがゆるくなりやすいので難しいんです。京こまづくりで大切なのは、ひとことというなら、最後まできっちりタイトに巻いていくことです。色合いを考えながら10色ほどの平紐を使い円形に巻き終えたら、次に、いわゆるこまの形、円錐形になるよう親指で押さえながら形を整える。滑らかなカーブの円錐形になると、回したとき

に芯棒がブレずにまっすぐきれいに回る。

中村さんは一般的なこまの形をした京こまだけでなく、鹿ヶ谷かぼちゃや壬生菜など京野菜の形をした京こま、千支の動物などさまざまな形をした京こまを生み出している。父親たちがやってこなかった挑戦だ。「父たちは、決まつた形の京こまだけをつくっていました。複雑な形はつくらなくていいと考えていたんですね」。でも同じことをしては、時代を生き残れない。ならばと、お正月のものという印象があるこまだからこそ、夏らしい水風船のような真ん丸の京こまをつくってみたり、祇園祭の山鉾の京こまをつくったり。つきつぎにお客さまが喜んでくれるもの、自分がつくりたいと思うものを形にしていた。「悪戦苦闘ですよ(笑)。いったん消えた京こまを広めていくために」。昨年の万博では、公式グッズとしてミャクミャクの京こまも作成し、早々に完売の人氣だった。

複雑な形をした京こまづくりは、相当な手間がかかる。たとえば、今年の千支の「午」の京こまなら、円錐形に近いこまを2つつくり糊で貼り合わせ、絵の具で色を塗り、たてがみやしほも平紐でつくって、「ちよっと笑っているような顔になるように」筆先で午の目を描き、最後にニスを塗って…という具合に。

中村さんは、日本各地の催事場や海外での実演にも精力的に向く。「作品を展示するだけより、職人が実演すればずっと発信力が高いですから」。ドイツ、イタリア、アメリカ…そもそもこまは世界各国でつくられてきただけに、遊び方を伝えずとも世界の人たちが京こまを手持てば自然と遊び始めると中村さんはいう。「くるくると回ることから「物事が円満に回る」、まっすぐ芯棒が通っていることから「志を貫く」と縁起のよいこま。そんな日本のいわれも伝えながら、日本でも海外でも京こまをもっと手にして笑顔で遊んでもらえるといいなあと思っています」